

『パンタグリュエル』における 身振りのエピソードの解釈

石 橋 正 孝

序論

本稿では、16世紀フランソワ・ラブレーの『パンタグリュエル』（1532年）の18～20章、トマストとパニユルジュの身振りによる対話のエピソードについて考察する。イギリスから来た顕学の聖職者であるトマストが、主人公のパンタグリュエルの家来であるパニユルジュと哲学などの難問を議論するという枠組みである。肝心の議論の仕方は、ピタゴラスのやり方にならって数字での議論など様々な議論の方法が列挙された後で、身振りでの討論がトマストにより提案される。

しかし、話すことなく、身振りのみで議論をしたいのです。なぜなら議論の主題が難問ばかりで人の言葉では私の思うようにそれらを説明するには不十分だからです。どうかナヴァール学寮の大広間に朝の七時にお越しいただくよう、よろしくお願いいたします¹。

しかしながら、当日、いざ身振りでの二人の討論が始まると、話者はひたすら二人の身振りの描写に終始し、その身振りが示すはずの意味は読者に一切明かされない。

そこでイギリス人は次のような身振りをした。左手を開いたまま高くあげ、それからその四本指を握りしめ、親指は突き出したまま鼻先へ当てた。それから突然右手を開いて上に伸ばしたかと思うと、再び開いたまま下へおろし、その親指を、ぎゅっと握った左手の先の小指に添えてから、左手の四本指を静かに上へ開いた。その次に、今度は、これまでとは反対に、左手でしたことを右手にやらせ、右手でしたことを左手にやらせた²。

このように、それぞれの身振りの描写がひたすら続き、読者には、最後までこの身振りによる対話の内容は明かされない。このエピソードがフィクションの散文物語として文学史上極めて特異な点である。身体の動きによる身振りという記号をさらに言語表現という記号に変換しておきながら、その肝心の最初の記号が意味を奪われている状態である。

一方で、それぞれの身振り、身振り主体である登場人物の反応などを描写する文章は言語としてももちろん意味を成している。しかし、その連続で構成される身振りによる対話の意味はまったく分からないまま終わってしまう。読者としては、登場人物の相手の身振りに対する反応の描写、観衆の反応の描写などからなんらかの意味の交換が行われていることだけが明らかとされ、また民衆文化をモチーフとする身振りなど、当時の読者にとってはより明確な「仄めかし」をちりばめながら、話者はエピソードを最後まで進めていく。

文学的視点からすると、こうした意味を与えられない身振りの連続でエピソードを最後まで完結させること、さらにそれを様々な仄めかしで最後まで読み通すことのできるものとしていることは、身体の動き、身振りによる対話、それらの言語化へと、二重、三重に記号の位相の転換が行われていることと合わせて、まさにラブラーの作品を古典たらしめている、言葉に対する極限の挑戦といえるだろう。

ラブラー作品すべてに言えることではあるが、このエピソードにもすでに多くの先行研究があり³、大きく二つの潮流に分けることができる。M. スクリー

チのようにエピソードの背景・歴史的文脈からの風刺などの推察と、F. リゴロに代表される、文学言語の意味への挑戦として、記号論的価値評価に分かれる。しかしながら、肝心の身振り描写の意味の解明なしには、それまでのすべての研究は、中心が空白の周縁を回り続けるようなものになっていたことは否めない。

こうした状況で、2010年のラ・シャリテはエピソードの手の動きの描写に限定して、キケロ以来の修辞学の伝統を用いて解明しようとした試みだが⁴、その手法が修辞学のコードのみに依拠しており、意味解読そのものには至らず、解読可能性に言及するのみにとどまってしまった。

その後続く筆者の博士論文⁵においては、三部構成の第三部においてこのエピソードの包括的アプローチを試みた。一連の身振りの意味については、まずは中世の身振り文化についての考察から、フランス・ルネサンス期、16世紀前半の身振り文化について類型化を行い、そこから中世までの修道院で「沈黙の誓い」の下で発達してきた身振り言語の辞典を中心に解読作業を進め、複数の身振りの解読の仮説を提示した。

拙論の仮説の結論だけここに紹介すると、全部で36の身振りに区切ることでできる一連の身体描写について、解読の仮説を提示できたものだけをつなげて以下のような流れになる。最初のトマストの身振り「1. ハレルヤ→2. 続唱」に対してパニユルジュが「3. 詩編→翼」で返し、トマストは「7. 信じる→8. 敵 or ハンセン氏病→9. 新人指導僧」「翼→博士」の身振りを続ける。その後、パニユルジュの「10ハンセン氏病患者」を示すと思われる身振りから議論が脱線してラブレール特有の一連のグロテスク・リアリズムやカーニヴァルのモチーフの模倣の身振りなど、猥褻・コミカルなやりとりが18～24の身振りのやりとりまで続く。トマストの「11結婚初夜」に対してパニユルジュの「12性交を想起させる猥褻な身振り」に対して13以降は、性交、呼吸「19大道芸のコミカルな身振り」、「20数字の2万」、「21楽器を用いた大道芸」、「23カーニヴァルのモチーフである肛門奉納」。次に、パニユルジュが「25. 独身聖職者」と身振りを続けるが、トマストは「26剣を用いたオカルトの悪魔払いの身振り」で

対応し、パニユルジュは「27男性器、28バーゼルの町のカーニヴァルの紋章である舐め王」それに対してパニユルジュは「30見習い僧→31傲慢→34罪」と続けて返す⁶。最後は、「36しかめ面の愚者のカーニヴァルのマスク」の身振りで議論が終わる。

この流れだけでは、エピソード全体の整合性のある意味を解明できたとは当然言えない。このエピソードの研究でやり残されていることは、さらに残された身振り解説を続けるか、もしくはエピソードのそれ以外の手がかりとあわせてこれまでの成果の解釈を進めていくか、または両方を平行して続けていくかになる。本稿では第二の選択肢をとり、これまでの研究の現状をふまえつつ、さらなる身振りの解説に焦点を当てるのではなく、先行研究の流れを整理しつつ、これまでの解説の成果とあわせて、2点の新たな補足解釈を加えることで、改めて全体的な価値の再評価を試みる。

1点目は、『パンタグリユエル』の作品中でこのトマストのエピソードと対をなす、ベーズキュとユムヴェースの訴訟のエピソードとの関連に注目する。このエピソードのテーマとして、フランスとローマ教皇との権力闘争が背景として読み取れるので、その歴史的背景との関連性で考察する。

2点目は、パニユルジュの身振りでの対話相手のトマストがイギリスから来たということの必然性について考察する。当時の1点目の教会の権力闘争との関連で、当時のイギリスの宗教改革の事情について、トマス・モアとその役割について、エピソードとの関連で考える。

Réformatio：バーゼル公会議（1431）；プラグマティック・サンクション⁷（1438）；ボローニャ政教条約（1516）

『パンタグリユエル』の構造は、G. ドゥメルソンが指摘するように西洋文学の伝統的技法に則っており、A-B-C-D-E-F-E'-D'-C'-B'-A' という対応関係を持つ「包含」型の鏡構造になっている⁸。トマストのエピソードに鏡構造で対応するのは、同じく「意味不明な討論」のテーマで括ることのできる、10章から13

章にかけてのユームヴェーヌとベーズキュのエピソードである。

トマストのエピソードが意味を与えられない身振り描写の連続でつくられているのに対して、ユームヴェーヌのエピソードは、伝統的コミックの技法である coq-à-l'âne⁹ の作品であり、現代の文学史で扱うとすればまさにシュール・レアリスムというべき¹⁰、意味をなさない長文での討論となっている。しかしその無意味の連続を最後まで読者に読ませるように、さまざまな技巧が仕込まれている。まず「買い物に行く女性の道程」という枠組みへの言及が繰り返されることで、読者にとっては物語が進行している、何かが展開している、という予測・期待を維持しながら、「次はどうなるのだろうか」という物語の興味の断片に引きずられて読み続けることになる。

それに加えて、ラブレー特有の歴史的出来事、体制・思想への「灰めかし」がある。検閲の厳しい時代に風刺・批判を行うために、当時の読者であれば容易に気づいたであろうその時代の出来事などへの灰めかしが、「謎解き」として読者の興味を引っ張っていく。これは、トマストのエピソードと同じ技法である。読者としては本筋とは別の当時の政治・社会・宗教などに関する風刺・批判という別の筋を与えられることになり、エピソード全体としては明らかな意味を把握しないまま、物語の本筋と風刺という重層的な手がかりに牽引されて最後まで意味不明な議論を読み通すことができるのである。ここにおいても、トマストの身振りのエピソードと同様に、読者としては記号に意味を求めずにはいられないという人間の認識の本性そのものを最大限に利用するラブレーの筆致に乗せられて、さらには記号とは、言語とは何かという挑発を読むという行為を通して実体験させられながら読み続けていく。

ところで陛下、（とベーズキュは言った）この女性は、「歡び給え」や「われらを聞き入れ給え」など唱えながらも、大学特権の一撃より身を守ることはできなかった。…されば、（とベーズキュは言った、）プラグマティック・サンクションにも少しの言及も見られず、また教皇は各人に思うがままに放屁するの自由を与えたのです¹¹。

ここで、全体としての意味は不明ではあるが、大学特権に続いてプラグマティック・サンクション¹²への言及がなされている。これにより、当時の読者にとっては、国家・教会に広がっていた「réformatio」=改革の議論¹³がエピソードの背景にあると推測することが必然だったのではないか。

ここで、こうした歴史的背景を概観すると、当時、フランス王権は、ローマ教皇とのフランス国内における教会への支配権をめぐる1世紀以上続く主導権争いを行っていた。教会大分裂(1378-1417)を通じて大きく失墜したローマ教皇の権威は、百年戦争でいったん棚上げのような状態になっていたが、1431年のバーゼル宗教公会議では、教会大分裂の反省を踏まえ、カトリックの教皇が二人相並ぶということがないように、教皇権よりも公会議の権威を上置き、教皇の全面敗北となる決定が行われた。ローマ教会の重要な収入源であった各国内の教区の税の徴収権が王権に移管すること、また各教区及び各教区内の修道院の人事を含む行政管轄権の王権への移管が決定されたが、当然この決定は紛糾を重ね、1431年のバーゼル公会議は何度も場所を移しながら続けられた事実があり、ラブレの同時代の読者にとっては、バーゼル公会議はその紛糾により記憶されていたものであろう。

この教皇権力を制御するバーゼル公会議の動きは、フランスにおいては、1438年フランス中部のブルジュにおいてフランス国王シャルル7世により発令されたプラグマティック・サンクションの形で決着を見ることになる。これにより、フランスの聖職者はフランス王の支配下に置かれ、更にここでトマストのエピソードとの関連で見逃してはならないその他の決定も行われている。すなわち、大学も教会における聖職を確保する権利を獲得し、教会に対する大学の特権的優位が確立され、さらには修道院の特権的自治が維持されることになるのである¹⁴。

しかしながら、紛糾して場所を移転し続けた会議がこれで完全決着となるわけもなく、フランス王権とローマ教皇との権力闘争はその後も続くことになる。最終的には、イタリア戦争のさなか、1515年のマリニャンの戦いで教皇レオン10世とスイスの連合軍に勝利を収めたフランソワ1世が、翌年の1516年に教皇

とボローニャ政教条約¹⁵を締結して決着する。これにより、フランス教会においてはフランス王の支配権が最終的に確立されることとなる。一方、プラグマティック・サンクションで教会と大学が獲得した特権は廃棄されることになり、フランス国王とローマ教皇はお互いに権力を分かち合うことで長年の対立は妥協点を見出すのである¹⁶。

フランスに限らずに宗教改革の流れの中で見ると、このボローニャ政教条約は、中央集権国家成立の条件が整いつつあったヨーロッパ各国内からローマ教皇の支配権が消滅する不可逆的決定として見るができるだろう。宗教改革といえ、1517年のルターの95箇条の論題がその象徴的出来事として記憶されているが、1516年ボローニャ政教条約は政治的にはもっとも重要な出来事であり、文化的には同1516年のエラスムスのギリシア語新約聖書の出版もあり、これら三つの事件が政治・文化・教義の領域ではほぼ同時に発生することで、すでに水面下で大きく動き出していた宗教改革が一気に大きな波として顕在化するのである。

このように、教会大分裂以来一世紀半にわたって続いた絶対的教皇権の失墜過程と近代中央集権国家の台頭の流れの中で、プラグマティック・サンクションへの言及がベースキュのエピソードにあることは、ラブレールの同時代の読者にとっては100年前の出来事とはいってもきわめてアクチュアルな出来事として捉えられていたのだろう。

こうした歴史的な「改革」の機運がラブレールの作品の「灰めかし」の背景となっていることは確かだが、それでは果たしてベースキュのエピソードに見られたこうした改革への灰めかしがトマストのエピソードにも同様に隠されているのかという点については、この二つのエピソードが鏡構造で対称的なペアとなっていることだけが根拠ではない。トマストのエピソードには、ベースキュとユームヴェーヌが、実際に身振りの形で登場しているのだ。

そうするとトマストはコーヌミューズのように両頬を膨らし始め、豚の棒鋼でも膨らますように、ふうふう言った。これに対してパニユル

ジュは、左手の指を一本、知りの穴に当てがい、口では、殻付きのままで牡蠣を食う時とか吸る時とかのような音を立てながら、息を吸い込んだ。…しかしトマスは相変わらず牡山羊のようにふうふう言っていた¹⁷。

ユームヴェーヌとベーズキュは、フランス語では「風を吸い込む」と「尻にキスをする」という意味だが、それぞれカーニヴァルのモチーフとなっており¹⁸、ここに両者の身振りによって再現されている。これにより二つのエピソードの関連性が明示的に示されたとして、さらにテーマとしての宗教改革に関しては、プラグマティック・サンクションの内容が議論され、教皇派と反対派の間で激しく会議が紛糾したことで有名となったバーゼルがトマスの身振りによって暗示されるのである。

それから、両手を櫛のように組み合わせて頭上に置き、できるだけ長く舌を出し、断末魔の牡山羊のように白眼を出したまま、眼窩のなかで眼球をぐるぐるまわした¹⁹。

この身振りが描く *roi lecheur*、「舐め王」というのは、16世紀、カーニヴァルのモチーフとして小バーゼルと大バーゼルの二つの町をつなぐ橋の一端に掲げられていた木製のマスクであり、バーゼルのシンボルとなっていたのである²⁰。また、議論の終わり、最後のパニユルジュの身振りを見てみよう。

そこでパニユルジュは、左右の人差し指と中指とを口の両端に突っ込み、あらん限りの地からで引っ張って、歯を全部むき出しにした。そして、二本の親指で両目の目蓋をぎゅっと押しつけながら、その場にいた人々がみていた通り、実に醜惡な渋面をつくったのである²¹。

この身振りがつくる、話者のコメントが解釈を補強してくれる「しかめ面」は、

ブルジュ郊外の元修道院であるシェザル・ブノワ教会にレリーフがおかれている。注目すべきは、その場所である。「尻舐め王」の身振りでプラグマティック・サンクションの出発点であるバーゼルに言及したラブレーが、身振りの議論の最後をプラグマティック・サンクションが発令されたブルジュを暗示するカーニヴァルのモチーフで表していることは偶然ではない。

このように、ベーズキュのエピソードの背景としてのみ取り上げられていたプラグマティック・サンクションがトマストのエピソードの背景にもなっていることは間違いないだろう²²。より正確に言えば、意味の与えられない議論を当時の読者に読み続けさせるための「あたかも意味のありそうな仄めかし」のひとつとしてバーゼル公会議とプラグマティック・サンクションが仕込まれているのである。読者は、意味がわからないながらも、背景に体制批判、宗教改革への揶揄などが隠されているのかもしれないと思いながら、そうした「意味」を求める欲求に牽引されて、意味の明らかでないエピソードを読み続けていくことになる。

宗教改革と修道院改革

次に、この改革議論の枠組みに沿って、もう一つの背景設定として、トマストがイギリス人である点について考察する。

顯学の聖職者であるトマストがパンタグリュエルと議論することを目的にイギリスから来るわけだが、なぜ、イギリスなのか。この素朴な疑問については、これまでの研究で取り上げられてこなかった部分である。後に言及するが、イギリスという要素はトマストという名前の解釈に集約されてしまい、トマストがイギリスから学術的議論をしにやってくることの必然性はそれ以上考察の対象となることはなかった。

そこで、プラグマティック・サンクションを背景とする宗教改革の文脈から改めてイギリスとフランスの関係について考えていくが、当時のイギリスとフランスは、近代の入り口での大きな社会的変動の中、それぞれヘンリー 8 世とフランソワ 1 世という名君が出てきて、スペイン・神聖ローマ帝国のカルル 5

世と三つ巴の覇権争いをしていた時代である。

そのイギリスでは、当時何が起こっていたか²³。『パンタグリュエル』が出版された1532年以前を背景として考えると、聖職者であるトマスがフランスに来るのは、上述の1516年ボローニャ政教条約を契機としてヨーロッパ全土で宗教改革の大きな波が動き出した渦中であるが、とりわけイギリスでは1527年から29年にかけてのヘンリー8世の離婚問題から、ローマ教皇からのイギリス教会の離脱の動きが進んでいた。ヘンリー8世は1534年にイギリス国教会を設立し、1536年、39年に続けて修道院解散令を出して僧院領地を国有化する。

また、ここで軽視してはならないのが、歴史上はあまり取り上げられない修道院改革である。15世紀後半から、修道僧の腐敗・墮落が目に見えようになり、真っ先に改革 = *réformatio* の対象となっていた²⁴。

これは修道院改革そのものに関しても言えることで、現代の読者にとって、宗教改革というのは、カトリックに対するプロテスタントの運動に集約されてしまうが、15世紀から16世紀にかけての社会の変革に伴うキリスト教全体の大きな改革の波は、大きく三つの動きとして捉えなければならない。すなわち、1480年代に他の動きに先駆けて起こるのが修道院改革、1517年のルターの論題に代表されるプロテスタントの動き、加えてプロテスタントの動きに対抗する為に1545年から1563年まで三度にわたって開かれたトリエント公会議に象徴されるカトリック側の内部改革である。

J.-M. ル・ガルが主張するように、カトリック教会の改革の動き自体は12世紀の教会大分裂の時から動き始めていたのであり、百年戦争で中断していた動きが再び動き出したというにすぎない²⁵。時系列で見ると、ルネサンス期の宗教改革と呼ばれる歴史的な改革の波は、修道院の改革が発端となっているのであり、1480年代、フランスのルネサンスの動きが印刷術の普及と同時に始まる頃に、修道院の改革運動も活発となり始めた。1493年、シャルル8世の招集したトゥールでの会議が王権も加わっての正式な修道院の改革運動の幕開けとあっていいが、さらに、シャルル8世が翌1494年に開始したイタリア戦争は、イタリア・ルネサンスの文化のフランスへの伝播を一気に加速させることとな

り、réformatio の機運を社会全体に加速させる大きな契機となり、それに合わせて修道院改革も加速していく。

トマスという名前の解釈については、先行研究においても複数の仮説が提示されている。自身が聖職者でもありイギリス人でもある M. スクリーチは、トマスに『記号を操る魔法使い』という裏の意味とイギリス人のきわめてありきたりな『トマス』の名前の掛け合わせと主張する²⁶。確かに、トマスという名前は実に多くの思想家にも見出され、トマス・アクィナス、トマス・チョバム、トマス・ウェイリーズなど、トマスの名を持つ多くの神学者・聖職者が浮かんでくる。

トマス・アクィナスに関しては、身振りのエピソードとの関連で思い浮かぶのは、偉大な思想家としてではなく、街頭での大道芸人の見世物に関してその身振りに規律を主張した人物としてのトマスである。これは、トマスとパニユルジュの身振りによる街頭での討論の背景の一つとして、当時の街頭での修道僧の説法と大道芸が道を挟んで対峙していた光景が重なっていると考えることができ、日常・民衆文化のモチーフなどを登場人物に重ねていくラブレーの技法とも一致する。

当時の街頭では、身振りを駆使して衆目を集めようとしたフランシスコ派やドミニコ会修道僧の辻説法と大道芸人の派手な動作の見世物が四つ辻で向かい合って観衆の注目を奪い合っていた²⁷。その大仰で下品な身振りはトマス・アクィナスの批判の対象となった。厳格な神学の観点から、大道芸など人間の遊びに属するものに否定的であった聖トマスは、やがて寛容な判断を下すようになるが、同時にその身振りに節度を要求し、聖なる場所での活動を避けるように求めたのである²⁸。

パリに学びに来たイギリスのトマス・チョバムもトマス・アクィナスと同様に大道芸人への批判から、良い身振りと悪い身振りの区別を設けた神学者であり、イギリスのドミニコ会修道僧のトマス・ウェイリーズも同様に、修道僧の辻説法の身振りが大道芸人の滑稽な身振りに酷似してきたことに憂慮を示し、身振りに modestia = 節度を求めたのである²⁹。

同時に、これらの修道僧と大道芸人の身振りに関しての共通項を持つトマスとは別に、ラブレーの同時代にはさらに有名なトマスがいる。トマス・モアである。後述するように、トマストのモデルとして十分な資格を有しているように思えるが、先行研究の中では、モデルとしてトマス・モアの名前に言及されることはなかった。それは、トマス・モアがラブレーと同じ理念を共有する人文主義者であるのに対して、トマストはエピソード内では脱糞するなどのコミック・格下げの対象となっているので、トマス・モアがこうした対象になることはないだろうという考えがあったかもしれない。

トマス・モアとラブレーの関係は歴史的資料から直接の関わりを見出すことはできないが、ラブレーが「わが父、わが母」と呼びかけ³⁰絶対的畏敬の念を示していたエラスムスとトマス・モアは同じ人文主義者として理念を共有し深い親交があり、またラブレーの作品中のテレームの僧院は、ラブレーの描くユートピアであり、その発想にトマス・モアの作品からの影響があることも明白であり、少なくともラブレーにとってトマス・モアは批判や揶揄、風刺の対象でないことは確かであろう。

とはいえ、トマストが身振りでの対話中に行き詰って脱糞するなどの滑稽な場面があるからという理由で、トマス・モアをトマストのモデルの仮説から排除する理由になるだろうか。主人公であるパンタグリュエル、そして次の作品の主人公になる父のガルガンチュアも同様に、高らかな笑いと共に現実離れした大量の食事、放尿などの排泄ですら生命の根幹として肯定的に描かれていないだろうか。

ラブレーにおいては、排泄、性器、飲食などの荒唐無稽な誇張描写による、物質的・生理学的肉体の強調側面は、バフチンの言うところのグロテスク・リアリズム³¹として、ローマ教皇、パリ神学部、カルヴァン派などへの批判・攻撃とは、区別して考えるべきである。これらを区別して注意深くトマストの描写を追っていくと、トマストへの批判はエピソード中に見当たらないのだ。身振りでの討論が終わった後の宴を描いた20章においては、パニユルジュに議論を任せたパンタグリュエルとトマストがお互いへの敬意を表しあう中でのラブ

レー的な宴で終わるものであり、トマスは、ラブレーのスタイルにおいては風刺・批判の対象とは言えないであろう。

そこで、トマス・モアをトマスのモデルとして想定した場合、宗教改革の流れの中では何が関連してくるのか。一番ここで大きいのは、まさに修道院改革なのである。トマスと同じ聖職者 Clerc であるトマス・モアは、以前は修道僧であった。ヘンリー 8 世に従事するようになって Clerc となったのである。『パンタグリユエル』出版の1532年の段階では Clerc としてヘンリー 8 世に助言する立場にあり、その修道院解散の計画に強く反対する。やがて、それが原因でトマス・モアは1535年に処刑されてしまうことになるが、トマス・モアの反対むなしくイギリスにおける修道院は1536年、1539年の二回の解散令によりその荘園領地とともに消滅することになる。

トマスは、修道院が消滅の危機にあるイギリスから、積極的に修道院の改革を進める中心地となったナヴァール学寮に来て、パンタグリユエルに相談に来たのではなかったか。そう考えると、ヨーロッパ全体で起きていた宗教改革の先駆けとしての修道院の改革の過程で起こる様々な諸問題が、身振りによる議論のテーマの一つとして当時の読者に想定されていたと考えるべきであろう。

エピソード全体の解釈

最後に、冒頭で紹介したこれまでの解読成果に対して、改めて二つの宗教改革の動きとの関連を見ていこう。プラグマティック・サンクションに関しては、議論が行われた各都市のカーニヴァルのモチーフを身振りで描くことでその関連が暗示されるわけだが、プラグマティック・サンクションからボローニャ政教条約に至る過程で議論の対象となった改革の内容に関しては、大学特権についてなのか、僧院改革についてなのか、教皇権への批判なのか、それともそれらの全てを含めての改革そのものをテーマとしているのか、解読された身振りとの関連で見ながら判断していく以外にない。

最初の一連の身振り、『ハレルヤ→続唱→詩編→翼』と続く教会典礼の導入で、詩編には翼のメタファーが多用されることも含めて、当時の読者であれば

容易に理解できる範囲であり、描写される身振りには実際に意味があると思わせ、議論の開始を告げるものとして読者を引き込む。次いで、『信じる→敵→新人指導僧』と見習い修道僧の指導係、傲慢が罪であることなどの意味を持つ身振りが連続することで、我々現代の読者には馴染みはないが、当時の読者には高い時事性をもつ修道院の改革がテーマの一つとなっているのではないかと推論していく。すでにみたように、15世紀末に始まった修道院改革の結果として、フランスでは新しい改革僧院、改革派僧が増えていき、パリの修道院では半数以上が20歳未満の見習い僧で占められているところも出てきたような状況であり、その指導係との間の軋轢が問題となっていたことも、エピソードの背景となっていたであろう。

身振りの解説に沿って解釈をさらに続けていくと、いくつか未解明の身振りを残したままでも、途中、『敵』を『ハンセン病』と取り違えることから議論が脱線しカーニヴァル的なやりとりに移行していくのが理解できる。その中でも、『結婚→性交』などの明らかな身振りが行われ、『独身聖職者』などの身振りを挟むことで、当時の改革の主要な議題の一つである聖職者の結婚についての議論³²が交わされているようにも思わせ、最後は再び、『見習い僧→傲慢→罪』と続いて、ブルジュのカーニヴァルのモチーフの身振りで議論が終わることで、バーゼルで始まったプラグマティック・サンクションの議論が閉じる形になるわけである。

ここまでの過程が示すとおり、トマストのエピソードのみならず、ラブレーの作品を読むには、二つの二つの知的アプローチが必要となる。一つは、純粹な謎解きの楽しみであり、思想的にエピソード中にちりばめられた実に多様なヒント・仄めかし、政治批判・風刺などを読み解き、鏡構造の他のエピソードもヒントにしつつ、ラブレーがこのエピソードに込めた意図はなんであったかを解きほぐしていくことの純粹に知的な楽しみである。しかし、ここで持ち上げる疑問は、果たしてラブレーが明確ななんらかの隠された意図をここに込めていたのかどうかである。

ラブレーのエピソードの特徴は、仄めかしに満ちてはいるものの、明確な隠

れたメッセージというものがあるようには思えない。当時の時事問題、文化・芸術の知識、法律・医学の知識に、宗教・政治の問題を練りこんで、重層的に作り上げていくが、その背後に隠し絵のように明確な意図はないのかもしれないように思える。他のエピソードと比較しても、例えばトマストと対のエピソードであるベーズキュのエピソードには、M. スクリーチが指摘するように、プラグマティック・サンクションのみならず実に多くの要素が重層的にエピソードの背景として組み合わされている³³。

ラブラーの技法は、その重層性にある。同時代の話題、事件、思想的・政治的議論など、当時の読者にとっては仄めかすだけですぐに気づいてもらえるテーマ・モチーフを幾重にも積み重ねていきながら、その奥にさらに隠された意味があるかのようにしていく。パンタグリユエルに続く『ガルガンチュア』（1534）の序文にある有名な「骨髓」の比喩は、骨にくるまれた骨髓をすするように、エピソードに秘められたエッセンスを味わって読むようにという勧めであるが³⁴、その序文を書いたアルコフリバス・ナジエ³⁵の序文を真に受けてはならないだろう。

そして、もう一つの知的アプローチは、ラブラーの記号に対する極限の挑戦をどう受け止めるか、読者としての質が問われる部分である。上述のように、ラブラーのスタイルは、同時代の読者が関心をもてる様々な領域の時事問題を重層的に織り込むことで、その背後に何か意味があるように思わせることで、物量としての言葉そのものに触れさせるのが特徴である。逆説的に言えば、様々な思わせぶり、仄めかしの背後には、明確なメッセージは隠されていないのだ。それでも、読者は思わせぶりの仕掛けにつられながら最後まで物量としての言語を読み通してしまう。

このラブラーの仕掛けが、トマストのエピソードにおいては最大に発揮されているとっていいだろう。ラブラーはこのエピソードにおいて、言葉の意味とは何かという文学・言語学における究極の問題を、意味成立の手前のギリギリまで追求しており、記号的意味の欠落した身振り描写の連続を読む行為には、やがて動作の描写の連続にその所有者であるトマスト、パニユルジュの固有性

が失われていく。言語の線条性により、身振り動作の描写を読むという行為の中には、登場人物の固有性を線条性により洗い落とされた無記名の不気味な動く身体が浮かび上がってくる。

これは、記号の先にシンボルの意味を求める人間の本性に依存した技法であり、読者の認識の本性に直接仕掛けてくる記号的挑発である。E. カッシーラーは、次のように指摘する。「人間の認識は、その本性上、シンボルの認識である。そしてこの特性こそが、認識の力と限界の両方を特徴づけているのだ。シンボルの思考にとっては、現実と可能、実際と観念の間に明確な区別をすることは、絶対に必要なことである。シンボルは、物理的世界の一部として現実に存在はしないのだ。ただ、それは「意味」をもっているだけである³⁶。」

では、「意味」を奪われたシンボルはどうなるか。ラブレーの描いた身体は、当時の時事問題に関する無数の仄めかしをちりばめることで身振りの対話に「意味」があるように錯覚させることで、意味を奪われた動く身体というシンボルを読ませ続けることに成功している。身振り描写は、その線条性の中にトマスト、パニユルジュという動作主体が消えていき、意味をすべて奪われることで、「現実的」意味としてではなく、「可能的」身体、生きた生身の、グロテスクな動く肉体として、現実よりも一層に生々しく顕れてくる³⁷。ラブレーがここで行った記号の実験の意義は、他に類を見ない。言葉の意味を奪うことによる意味の追及という、記号に対する極限の実験である。ラブレーの真価は、この記号的挑戦にあるというべきだろう。

実際、エピソードに現れるこの無記名の可能態としての身体と同様に、その他のエピソードにおいてもラブレーの作品全体を通して見られる言葉の圧倒的な羅列、列挙の技法においては、物語の意味の流れを絶えず断ち切りながら、言葉そのものが自己増殖していく。これは、身振りの描写と同様に言葉の「意味」、そして人間の記号認識についてのラブレーの極限の問いかけではないだろうか。そうした記号的な実験を、読み物として読者に体験させるからこそ、5世紀前の書物がいまだに読まれる古典として受け継がれているのだろう。

結論

ここまで、ラブレーの記号への挑戦を見てきた。それは「いかにして記号から意味を奪い、いかにして意味を奪われた記号を記号として成立させるか＝いかにして意味不明なものを読者に読ませるか」という挑戦であり、そこでは絵画における隠し絵のように、エピソード中にさまざまな仕掛けをする作家としての技巧の高さが際立っていることを示してきた。この技巧は、グロテスク・リアリズムのイメージが先行するラブレーにおいては見逃されがちな点である。

ガリレイ同様のルネサンス人として、政治・医学・法律・神学・芸術などの広大な領域の深い知識に根差した重層的なモチーフの重ね合わせで、それぞれのエピソードに一元的ではない複雑な深みを与えている。それぞれのモチーフは絡まりあうことで、そこに隠されたメッセージがあるかのように読者に思わせ、意味不明・意味過剰な記号の氾濫する世界を読ませる。

加えて、知識偏重ではなく、そこに民衆文化のグロテスク・リアリズムを対置させてすべてを相対化する卓越したバランス感覚を作品に与え、単なる社会・政治批判ではない文学的豊かさを生み出している。ラブレーの作品は、ユマニストとしての生の強い肯定と、記号へのギリギリの挑戦を基調として、揺るがない作品価値を生み出し続ける。トマストのエピソードのみならず、研究者としてラブレーの作品の本質を見失わないようにするためには、この技法の重層性と、ギリシア・ローマ古典を含むルネサンス知への深い造詣に支えられた明るい生の肯定、そして記号に対する天才の挑戦というそれぞれの特性の深みの中で、一つの特性のみに囚われず、常にその全体を見失わないようにする姿勢が必要である。

- 1 François Rabelais, *Pantagruel* (1532), dans *l'œuvre complète*, l'édition de M. Huchon, Paris, Gallimard, dans la collection « Pléiade », 1994, ch.XIX, (以下 PG), p. 282 : « Mais je veulx disputer par signes seulement sans parler : car les matieres sont tant ardues, que les parolles humaines ne seroyent suffisantes à les expliquer à mon plaisir. Par ce il plaira à ta magnificence de soy y trouver, ce sera en la

grande salle de Navarre à sept heures de matin. »

- 2 *PG*, p. 286-287 : « Lors feist l'Angloys tel signe. La main gausche toute ouverte il leva hault en l'air. Puys ferma on poing les quatre doigts d'ycelle, et le poulse extendu assist suz la pinne du nez. Soubdain après leva la dextre toute ouverte, et toute ouverte la baissa joignant le poulse on lieu que fermoyt le petit doigt de la gausche, et les quatre doigtz d'ycelle mouvoyt lentement en l'air. Puys au rebours feist de la dextre ce qu'il avoyt faict de la gausche et de la gausche, ce que avoyt faict de la dextre. »
- 3 (Cf.) M.-A. Screech, *Rabelais*, 1979, (trad. par M. De Kisch), Paris, Gallimard, 1992 ; F. Rigolot, *Les Langages de Rabelais Etudes Rabelaisiennes*, t. X, Genève, Droz, 1972; M.-L. Demonet, *Les Voix du signe : Nature et origine du langage à la Renaissance (1480-1580)*, Paris, Honoré Champion, 1992 ; R. Antonioli, *Rabelais et la médecine Etudes rabelaisiennes* t. XII, Genève, Droz, 1976 ; J. Parkin, « Comic Modality in Rabelais : Baisecul, Humevesne, Thaumaste », *Etudes Rabelaisiennes*, XVIII, pp. 57-82 ; Eva Kushner, « Gesture in the Work of Rabelais », *Renaissance and Reformantion*, XXII, 1, 1986. ; Paul J. Smith, « Voix et geste chez Rabelais », *Literaturwissenschaftliches Jahrbuch*, Berlin, 1992. G. Defaux, *Pantagruel et les sophistes*, La Haye, Nijhoff, 1973.
- 4 Cl. La Charité, « La disputation par signes et la « philochirosophie » dans *Etudes rabelaisiennes* t.XLIX, Genève, Droz, 2010, p. 15-36.
- 5 Masataka ISHIBASHI, *L'image du corps dans les textes narratifs à la Renaissance (1530-1560)*, soutenue à l'Université de Paris III en mars 2013 sous la direction de M.-M. Fragonard et N. Dauvois.
- 6 *Ibid.*, pp. 272-278.
- 7 Pragmatique Sanction の訳語に関しては、国事勅書、大憲章などの訳語が存在するが、これは、国連憲章などと同様に、国家体を持たない国家規模の組織の基本法を指すものであり、カトリック教会という組織体の基本法として考えるものである。渡辺和夫はパンタグリュエルの翻訳に際して「大憲章」と訳している。本稿では、大憲章という一般的呼称を避け、日本では馴染みのない用語をあえてそのままカタカナ表記とすることで、1438年のブルジュでの決定の歴史的意義を強調している。
- 8 G. Demerson, *Rabelais*, Paris, 1986, p. 22. « Des symétries de structure suggèrent des parentés entre des épisodes. [...] un procédé de disposition bien connu de l'Antiquité et de la Bible et fréquemment utilisé à la Renaissance ».
- 9 Coq-à-l'âne については、以下参照 : H. Meylan, *Epîtres du coq à l'âne*, Genève, Droz, 1956 ; C. A. Mayer, « Coq-à-l'âne. Définition -Invention -Attribution », *French Studies*, XV, 1962.
- 10 (Cf.) J. Paris, *Rabelais au futur*, Paris, Seuil, 1970.
- 11 *PG*, ch. XI, p. 255 : « Or monsieur dist Baisecul, ladictte bonne femme disant ses

gaudez et audinos, ne peut se couvrir d'un revers fault montant par la vertuz guoy des privileges de l'université... Voyant donques, dist Baisecul, que la Pragmatique sanction n'en faisoit nulle mention, et que le pape donnoit liberté à un chascun de peter à son aise...»

- 12 M. Screech, *op. cit.*, p. 115.
- 13 J. -M. Le Gall, *Les moines au temps des réformes*, Seyssel, Champ Vallon, 2001, p. 19.
- 14 Voir, E. Rosenblieh, « La Juridiction du concile de Bâle ou la tentative d'instaurer la communauté conciliaire dans l'Eglise (1431-1449), dans *Hypothèses*, 1 (9), 2006, pp. 127-136.
- 15 Cf., B. Marceau, « Droit et politique au XVI^e siècle. Le Concordat de Bologne (1516) et la collation des bénéfices monastiques », dans *L'Année canonique* 2018/ 1 (Tome LIX), pp. 35 – 53.
- 16 M.-A. Screech, *op. cit.*, p. 115.
- 17 *PG*, pp. 288-289 : « Après cella Thaumaste commença enfler les deux joues comme un cornemuseur et souffloit, comme se il enfloit une vessie de porc. A quoy Panurge mist un doigt de la gauche ou trou du cul, et de la bouche tiroit l'air comme quand on mange des huytres en escalle : ou quand on hume sa soupe, ce fait ouvre quelque peu de la bouche et avecques le plat de la main dextre frappoit dessus, faisant en ce un grand son. »
- 18 Cl. Gaignebet, *A plus hault sens*, t.I, Paris, Maisonneuve et la Rose, 1986, pp. 58-62.ここに引用している身振り描写は、Cl. Gaignebet が提示する資料の中のカーニヴァルのモチーフと完全に一致している。
- 19 *PG.*, p. 299 : « ... puis mist ses deux mains lyées en forme de peigne sur sa teste, tirant la langue tant qu'il pouvoit, et tournant les yeulx en la teste, comme une chievre qui meurt. »
- 20 Cl. Gaignebet, *op.cit.*, p. 68.
- 21 *PG.*, p. 289: « Dont Panurge mist les deux maistres doigtz à chascun cousté de la bouche le retirant tant qu'il pouvoit et monstrant toutes ses dentz : et des deux poulses rabaissoit les paupieres des yeulx buen parfondement en faisant assez layde grimace selon que sembloit es assistans.
- 22 2001年の拙稿, « La réforme monastique et le geste de la prière autour de dialogue gestuel dans l'œuvre de F. Rabelais » dans *Cahiers d'études françaises Université Keio*, vol. 6, 2001, pp. 1 -14において, 17世紀のイギリスにおける祈りの身振りの改革に言及し, その文脈の源流として, プラグマティック・サンクションと僧院改革がトマストのエピソードの背景になっているという仮説を提示したが, 本稿では実際にその仮説を裏付けるためにカーニヴァルのそれぞれの土地のモチーフが身振りで描かれていることを示してその仮説を証明している。筆者はこれまで, 典礼での祈りの身振り, 僧院での身振りコード, 軍事教練, カバル魔術, 修辞学など, フラン

ス・ルネサンス期の身振り文化・身体知に関して多くの論文を書いてきたが、それはすべてトマストのエピソードの身振り解説のための「外堀を埋める作業」であり、既出の2013年の博士論文の第三部にその成果は集約されている。したがって、それ以前のその他論文への言及は割愛する。本稿の位置づけは、エピソード解釈に関して2013年の博士論文で一段落させた後、やり残した事項を追加補足し、それらの成果すべてを含めて改めてエピソードの総括をしている。

- 23 ヘンリー 8 世の治世におけるイギリスの政治・宗教・社会事情に関しては以下参照。
J.-M. Vincent Audin, *Histoire de Henri VIII Et Du Schisme d'Angleterre*, Wentworth Press 2018 ; J. Moreau, *L'anglicanisme : ses origines, ses conflits : Du schisme d'Henri VIII à la bataille de la Boyne*, Paris, Editions L'Harmattan, 2006.
- 24 修道院の腐敗状況に関しては、J.-M. Le Gall, *op.cit.*, pp. 24-25.
- 25 J.-M. Le Gall, I. Brian, *La vie religieuse en France : XVIe-XVIIIe siècle*, SEDES, 1999, p. 21 : « Longtemps, le terme de Réforme a signifié exclusivement le protestantisme. Celui-ci aurait dénoncé les abus catholiques et provoqué un sursaut catholique, la Contre-Réforme. Ce schéma historiographique forgé dès le XVIe siècle n'est plus admis aujourd'hui. En effet, depuis le XIVe siècle, la réforme de l'Eglise est réclamée, ses modalités définies. La guerre de Cent Ans l'a contrariée et retardée. Le retour de la paix et de la prospérité vers 1450-1480 lui permet de s'épanouir tandis que le climat spirituel décrit au chapitre précédent la rend urgente. La réforme de l'Eglise commence bien avant le concile de Trente et la Contre-Réforme.
- 26 M. Screech, *op.cit.*, p.124.
- 27 C. Casagrande et S. Vecchio, « Clercs et Jongleurs dans la société médiévale », *Annales E.S.C.*, n° 5, septembre-octobre 1979.
- 28 C. Casagrande et S. Vecchio, *op. cit.*, pp. 922-933 : « Saint Thomas d'Aquin pose le premier le problème au niveau théorique. Son originalité consiste justement à admettre théoriquement l'existence du jongleur. Il n'est plus possible, comme le faisait Hugues de Saint-Victor, de parler de l'activité ludique en ignorant les hommes qui en sont, d'une façon ou d'une autre, les protagonistes. [...] Le jongleur, qui en fait son métier, peut l'exercer sans être turpis, à condition de respecter quelques contraintes : exclure de son répertoire les mots et les gestes obscènes, éviter de déborder sur les espaces et sur les temps sacrés. »
- 29 J.-C. Schmitt, *La Raison des Gestes dans l'Occident médiéval*, Paris, Gallimard, 1990, 1995, p. 281 : « Ainsi la prédication mendicante des XIII-XIV ème siècles fait-elle la synthèse, plus ou moins équilibrée selon les cas, de deux traditions : celle de la rhétorique antique dont l'étude a repris dans les écoles urbaines et les universités depuis le XII ème siècle, et celle du spectacle des rues et des places, des jongleurs et de leur gesticulation. Deux prédicateurs anglais du début du XIV

ème siècle, Robert de Basevorn et Thomas Waleys, insistent particulièrement sur ce point. »

30 Cf., F. Rabelais, *Lettre à Erasme* (1532), dans *l'œuvre complète*, op.cit., p. 998

31 Cf., M. Bakhtine, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et sous la Renaissance*, trad. de russe par A. Robel, Paris, Gallimard, 1970, 1993,

32 Cf., M. Screech, *Rabelais et le mariage : Religion, morale et philosophie du rire*, traduit en français par Ann Bridge, *Etudes Rabelaisiennes*, t. XXVIII, Genève, Droz, 1992.

33 M. Screech, *Rabelais*, pp. 114-119.

34 F. Rabelais, *Gargantua*, dans *l'œuvre complète*, op. cit., p. 7.

35 ラブレーのアナグラム。

36 E. Cassirer, *An Essay on Man*, Yale University Press, 1956, p. 80 : « Human knowledge is by its very nature symbolic knowledge. It is this feature which characterizes both its strength and its limitations. And for symbolic thought it is indispensable to make a sharp distinction between real and possible, between actual and ideal things. A symbol has no actual existence as a part of the physical world; it has a “meaning”.

37 虚構における身体表象の在り処については、拙論参照。「小説における身体の在り処」日本大学法学部紀要桜文論叢103号，2021年，pp.205-221